

No. 1182

# ちびっ子将棋道場

— 愛 知 ・ 清 洲 —

175  
たじろ ( )

愛知県・名古屋市の近郊、西春日井郡清洲町では今、子供たちの間で将棋が大流行。月一回の将棋道場には幼稚園児から中学生まで約20人のちびっ子棋士がかけつけます。

道場が始まる前、全員が床に正座してしばし無念無想。まづ精神修養です。さて、いよいよ対局、狭い道場の中にはピシッ、ピシッと心地よいコマの音が響き渡ります。指導にあたるのはA級棋士、板谷進八段とあって子供たちの腕前はめきめき上達今ではお父さんより強いと胸を張るちびっ子棋士も出てきました。

まだ本将棋ができない子供たちはトビ将棋、ハサミ将棋、銀行将棋など、コマ慣れのゲームに興じています。

この道場の特色は将棋を通じての厳しいしつけとか。将来この道場から将棋の名人が出てくるかも知れません。

# 瓦に生きる

— 群 馬 ・ 藤 岡 —

280

269

北関東に位置する群馬県藤岡市。ここは瓦にふさわしい良質の土に恵まれ瓦づくりの街としてその名を知られている。落ちついた街のたたずまいの中にも鬼瓦のみごとな姿がある。

藤岡市の瓦の歴史は古い。今から1200年前関東の国分寺の瓦を焼いたのがその始まりと伝えられる。しかし本格的に瓦が造られるようになったのは庶民が瓦屋根の家に住めるようになった明治時代からである。以後、戦災からの復興、マイホームのブームに支えられ、今日まで来た。

瓦職人、山口喜代蔵さん59才。この街では1000年の伝統をもつ手づくりの鬼瓦を造れるただひとりの人である。山口さんが始めて土に触れたのは8才の時、以来50年にわたり伝統の手法を守りつづけてきた。手づくりの鬼瓦は出来あがるまで1ヶ月はゆうにかかる。今まで、数えきれない鬼瓦を造ってきたが、満足のいく作品は数少ないという。

この瓦づくりの仕事も後を継ぐ者が少なくなった。だが今、二男の茂さんは父の仕事を受け継ごうと真剣に土にとりくむ。

この若い後継者と手づくりの伝統の仕事は、将来もなお、このままの姿を保ちつづけることができるだろうか。